

鳥から見た森の生きものたち

ボルネオ島・狩猟民プナンの環境中心主義世界

奥野克巳

おくのかつみ / 立教大学、AA 研共同研究員

マレーシア・サラワク州（ボルネオ島）の熱帯林に暮らす狩猟民プナン（西プナン）にとって、鳥は食糧である。狩られて死んだ鳥は、忌み名で呼ばなければならない。鳥の鳴き声は、人間と動物に、何かを意味するものとして届けられ、鳥は、上空から森の動物の味方をするとされる。人間ではなく、動物や鳥たちを中心に描かれる環境中心主義世界の一端を取り上げたい。

鳥を食べ、悼む人

子どもは大人と一緒に、または自分たちだけで森のなかに入り、道すがら、鳥の鳴きまねを競い合う。例えば、サイチョウやオナガサイチョウ。その鳴き声は、子どもたちの成長につれて、本物の鳥の声と聞き分けられない程そっくりになる。

大人になった男たちは、獲物を求めて狩猟に出かける。上空を飛ぶ鳥を発見すると、その場に止まってあるいは木の上によじ登って、鳴きまねをして鳥をおびき寄せる。鳴き声を発し、その声におびき寄せられた鳥を吹矢で射止めるか、猟銃でしとめる。

キャンプに持ち帰られた鳥は解体・調理されるが、鳥を含めて、狩られた動物に対する厳格なタブーがある。狩られた動物の名前を、死後の名前（忌み名）に変えなければならない。サイチョウ（プナン語名：

ベレガン）の忌み名は「バロ・アテン（目が赤い）。オナガサイチョウ（トゥヴァウン）およびシワコブサイチョウ（モトウイ）の忌み名は、「バアト・ウルン（頭が重い）」というふうに。

獲物に対してそうしなければ、その動物の魂が天へと駆け上がり、カミに人の粗野な振る舞いを告げ口する。カミは、雷を轟かせ、大雨を降らせて洪水を引き起こしたり、雷を落とし、人を石化したりして、人びとに厄災をもたらすと考えられているからである。そのような災いを避けるために、狩られた鳥は丁重に忌み名で呼ばれる。

キュウカンチョウ（キヨン）の忌み名は「ジュイト・フォ（果実の鳥）」。その鳥が、果実が実っていることを告げることに由来する。オオフクロウ（コン）の忌み名は「ウアト」である。夜にウア、ウアと咆哮する

からである。セイラン（クアイ）は「ジュイト・モク」あるいは「ジュイト・アニ」。何も無い所（アニ）に座る（モク）からである。オジロウチワキジ（ピリンギウ）の忌み名は「ジュイト・ムディク」。果実の季節に実を求めて、川を下流から上流に「遡る（ムディク）」ようにやって来るからである。コシアカキジ（ダタア）の忌み名「ジュイト・ダト」は、「平らなところにいる鳥」という意味である。

鳥の忌み名の特徴は、その鳥の形態（目が赤い、頭が大きい）や行動様式（開けた場所に座る、平らな場所にいる）に基づいて付けられていることである。忌み名を持つ鳥よりも持たない鳥の方が圧倒的に多い。食用に供される機会が多い鳥に忌み名が付けられている。

忌み名とは、生前の名前で直接呼ぶことを控えて、死んだものを別の名で呼ぶことである。それは、人間であれ動物であれ、いなくなった存在の死を悼むために用いられる。

実りを告げる鳥

カンカブットという名の鳥は、果実の季節を告げにやってくる。しかし、その鳥を間近で見たとか、捕獲したプナンにこれまで会ったことはない。それは、大空の高い



ブラガ川で木舟に乗るプナン。



「頭が重い」という忌み名があるシワコブサイチョウ（モトウイ）。



所で^{さえず}轉るため、見たり捕まえたりすることができないとも言われる。カンカブツは、カッコウの一種だという説もあるが、その生態は、その存在を含めて謎である。

あるカンカブツ^{たん}譚では、その轉りがうるさくて、子の耳が聞こえなくなったことに腹を立てた親魚が、カンカブツの足に噛みついて折ったため、カンカブツが遠くに逃げてしまい、一時期、お告げの鳥がないため果物が実らず、動物たちが飢えに苛まれたことが語られる。別の話では、カンカブツの轉りを聞いて、イノシシたちが移動しはじめたのを見て、オジロウチワキジがその後について行くと、果実がたわわに実る場所にたどり着いたことが語られる。カンカブツ譚はどれも、その鳥が果実の季節を知らせることに関わっている。

謎多き鳥・カンカブツとは、果実を見つけて轉る鳥としての「鳥の総体」のことなのかもしれない。最初に、鳥たちが木になった実を啄ばみにやって来る。その後、樹上性の動物たちが実を食べに来る。つづいて、地上に落下した実を食べるために、地上の動物たちが木々の下に集う。それらの動物をめぐって、人間が森に猟に入る。ブナンはその因果についてよく知っているが、そのような森の生命現象の開始を、カンカブツに仮託して語るのである。

これに対して、滑空する実際の鳥たちもまた、カンカブツの轉りのように世界に何かをもたらすとされる。サイホウチョウの一種であるソツピティは、「ピティ(暑さ)をソック(開く)」と名づけられているように、ソツピティ、ソツピティと轉って、雨が上がって暑くなる晴れ間が訪れることを告げる。キュウカンチョウ(キヨン)もまた、キヨン、キヨンと轉って、果実があることを告げて回る。鳴き声は、人間だけに届くのではない。動物たちにもまた等しく届く。その意味で、鳥の声は、すべての生きものにとっての共通言語のようなものとブナンは言う。

動物を助ける鳥

ジュイト・バンガット。日本語に訳すならば、「リーフモンキー鳥」と名づけられた鳥がいる。ハイガシラアゴカムリヒヨドリである。人がリーフモンキー鳥に出くわすと、近くにリーフモンキーがいる。リーフモンキーに対しても、同じことが言える。樹上のリーフモンキーが、リーフモンキー鳥が鳴いているのを聞いたとする。リーフモンキーにとって、リーフモンキー鳥は、人間が近くにいることを知らせるため



毒矢を射られた小鳥。



樹冠の鳥を吹矢で狙うハンター。

に轉っているとされる。リーフモンキーは、その轉りを聞いて、自分たちをしとめようとする人間がいることを察知して、木枝を伝って逃げ去る。そのようにして、リーフモンキー鳥は、リーフモンキーを助ける。

「テナガザル鳥」(ジュイト・クラヴツ)もいる。カオジロヒヨドリである。ブナンによれば、それは轉って、テナガザルに人間がいることを伝え、テナガザルの命を助ける。リーフモンキー鳥にせよ、テナガザル鳥にせよ、それらは上空を飛行し、轉って、捕食者である人間がいることを動物に伝えて、動物の命を救うのである。

イノシシの味方をする鳥もいる。ハシリカッコウ(ブツジー)は、地上に棲むカッコウの一種である。ハシリカッコウは、イノシシが木の下で果実を齧っていると、そのそばに来てうるさくがなり立てる。落ちていて実を食べることができなくなったイノシシは、その場から走り去る。森のなかで反響する、イノシシが果実を齧る音を聞きつけて今まさにやって来るところの人間の捕食の危機を、イノシシは免れることになる。ハシリカッコウは、イノシシの命を救う。他方で、ブナンのハンターは、イノ

シシを逃してしまうことになる。

興味深いことに、ブナンによれば、人間を助ける鳥はいない。鳥は、つねに動物の味方をする。ブナンは、異類の発信に言語メッセージを読み取る聞きなしを行うが、彼らにとって、リーフモンキー鳥の聞きなしとは、近くにリーフモンキーがいるが、それは手に入らないということである。

ブナンが住むボルネオ島の森では、人間と鳥の関係は、必ずしも人間を中心にして組み立てられているわけではない。非人間、この場合、鳥や動物を中心とした見方が組み入れられているという意味で、非人間中心主義的な世界、あるいは環境中心主義世界が築かれているのだと言えるのではないだろうか。

ウォーレスクマタカ(ブラクイ)。



「平らなところにいる鳥」という忌み名があるコシアカキジ(ダタア)。



「目が赤い」という忌み名があるサイチョウ(ペレガン)。

「何もなしに座る」という忌み名があるセイラン(クアイ)。